

インストラクターが足りない

長野県林間学校の取り組み



木村佳司
長野県オリエンテーリング協会理事長
日本オリエンテーリング協会
業務執行理事 普及担当

2500人・・・この夏に林間学校行事で長野県を訪れた子供が、オリエンテーリングを体験した人数である。

右肩上がり

ここ3年ほどの間に、長野県でオリエンテーリングを体験する子供たちの数が右肩上がりに増えている。しかも本格的0-mapを使用した競技形式での経験である。

長野県内に作成した0-map(オリエンテーリング専用地図)を使ったイベントを、ここ数年いくつか実施してきた。その中で、いろいろな人との繋がりが増えてきた。そうした人達から、オリエンテーリングを林間学校プログラムに使用したいという話が多く寄せられ、いろいろと相談に乗り、モデルコースを作成してきた。

気が付くと、5月から6月は毎週のよう

に林間学校でのオリエンテーリングが実施されている。平日の実施が多い

求められるプロの対応

できることならオリエンテーリングに通じたインストラクターを派遣して指導にあたせたいところだが、長野県内にはインストラクターは少ない。平日対応もできるプロやセミプロが欲しいところだ。

オリエンテーリングを依頼してくる側もプロの旅行代理店が間に入り、学校の先生も教育のプロである。彼らの仕事の相手として、オリエンテーリング指導者側もプロとしての対応が求められる。

普及にはプロの力が必要

オリエンテーリングの体験者を増やすことは、普及のひとつの方法である。この手段として林間学校へのオリエンテーリングを採用してもらうことはとても有効である。だがそのためには、オリエンテーリング競技側の体制が、今のようなアマチュア体制では力不足である。

振り返ってみると、かつてオリエンテーリングが隆盛を極めた40年前にはにわかプロがたくさん居た。だがその資金は政府の補助金に頼っていたのが現実ではなかっただろうか。

2012年の現在、オリエンテーリングの普及事業に補助金が出ることは稀である。そんな中でもプロが活躍できる仕組みを作ることが、オリエンテーリングの体験者を増やすカギだろう。

手段としてオリエンテーリング

さて、林間学校のプログラムとしてオリエンテーリングを売り込む場合、間違えてはならないことがある。林間学校を行う学校は、オリエンテーリングという競技を行いたいのではなく、子供たちの教育・体験プログラムを行いたいのである。

そのためには、先生方から要望を聞き、出来る限り要望に沿ったかたちにアレンジしてあげることである。

代表的なプログラム

林間学校のオリエンテーリングとして代表的なプログラムを紹介しよう。

- ・2時間のスコアオリエンテーリング
- ・班別対抗戦(1班6名程度)
- ・フラッグとパンチを設置
- ・地図は全員に支給

学校の計画として多いのは、宿舎を中心とした半日のアウトドアプログラムとして実施される。終了時間も決まっていることから、一定の時間になったら必ず終了するスコアオリエンテーリング形式が好まれる。

2時間の競技時間が確保できる場合はロゲイニング方式の配点で実施するが、1時間しか競技時間が取れないときはフリーポイント0方式を取ることが多い。

先生から提案されるアレンジとしてよくあるものは以下の通り。

- ・クイズポイントを入れる
- ・ゴミ拾い得点を入れる

学校側からこうした要望があれば、これらをルールに組み込んで実施している。だが先生提案のアレンジ部分の運営は、先生たち自身が現地でやっていたいでいる。

今までの経験からいうと、こうしたアレンジは単発で終わることが多い。同じ学校が実施する林間学校オリエンテーリングにおいて前年度と同じようにクイズやゴミ拾いを実施する例は、殆どない。

魅力的なプログラム

林間学校の代表的なグリーンシーズンプログラムとしては、ハイキング、登山、農業体験、工房体験などがあり、参加するにはそれなりに料金が発生する。オリエンテーリングにも料金が発生するが、それ以上の魅力を感じるプログラムになっているようだ。

高品質な体験に見合った料金をいた

(木村佳司)